

新年記念俳句会優秀作品

平成二十二年 二月一日

「白鳥」

天

白鳥の 騒めく鳴き声 湖に迫（せま）る 鈴木 武

地

白鳥に ふと瞳（め）の合ひて あたたかし 馬場 信彦

人

餌ありや 雪田（ゆきた）に遊ぶ 白鳥は 田中 悌司

佳作

五十嵐の 水面に白鳥 むれ遊ぶ 佐藤 栄祐

白鳥の 飛び行く先に 初日の出 坂井 範夫

大空を V（ブイ）字描いて 白鳥は 佐藤 秀夫

白鳥の 声に気がつき 冬仕度 馬場 輝仁

白鳥の 羽根のはばたく 朱鷺の里 坪井 正康

白鳥や 川に眠りて 雪だるま 荒澤 威彦

白鳥の ついばむ田圃 霜降りて 鈴木 武

首伸ばし カギの字組みし 白鳥は 丸山 征夫

白鳥の 真白き姿 無垢の舞 大溪 秀夫

白鳥よ 渡りし空は 春の色 野崎 正明

白鳥の 飛来賑う 休耕田 渡邊 久晃

遠来の 白鳥の舞う 下田郷 長谷川 晴生

大空に 白鳥の群れ 寒々と 坂井 範夫

「初日の出」

天

初日の出 何も変わらぬ 朝（あした）かな 広岡 豊樹

地

初日の出 妻と願ひし 子の成長 馬場 輝仁

人

かがやきを ひたすら待つ身 初日の出

荒澤 威彦

入選

産土（うぶすな）に 幸せ願う 初日かな

馬場 信彦

万福（まんぷく）の 年を頼みて 初日の出

田中 悌司

初日の出 まつしろき富士 美しく

鈴木 圀彦

佳作

新雪を 分けて弥彦の 初日の出

坂井 範夫

厳冬の 松にさしけり 初日の出

星野 健司

初日の出 願いかないし 夢をみて

佐藤 秀夫

白銀の 河原を照らす 初日の出

星野 健司

稜線が ほのかに白む 初日の出

佐々木 常行

年越せて 見守る中を 初日の出

馬場 信彦

紫に 山の頂（いただき） 初日の出

坪井 正康

雪山に 出でて輝け 初日の出

田中 悌司

今年こそ 誓いも新たに 初日の出

丸山 征夫

初日の出 思い万感 奮い立つ

大溪 秀夫

もろもろの 祈りをこめて 初日の出

野崎 正明

弥栄を 願うて迎える 初日の出

渡邊 久晃

「寒さ」

天

朝市に 商（あきな）ふ足の 寒さかな

鈴木 圀彦

地

帰る子に 荒れし手を振る 寒い朝

（長橋）

人

薄着する 娘のデート 寒さかな

佐々木 常行

入選

箱根路を 寒さ吹つとばす アスリート

長谷川 晴生

佳作

孫二人 寒さこらえて 初詣で
年寄りの 足うばいける 寒さかな
目覚めしも 布団出られず 寒さかな
工事場で 焚き火うれしや この寒さ
工事場の 焚き火に寒さ 思い知る
寒き朝 あたたかく読む 賀状かな
寒鰯の 旨さ噛み締む 笑顔にて
しんしんと 音の静かな 寒さかな
寒風や 都大路を 走りゆく
寒さ耐え 洗濯干す子 不器用に

佐藤秀夫
佐藤栄祐
星野健司
佐藤栄祐
佐藤栄祐
荒澤威彦
大溪秀夫
野崎正明
長谷川晴生
（長橋）

「白菜」

天

白菜に 心を込めし 料理かな
（原作 白菜に 心を込めて 料理かな）

広岡豊樹

地

白菜に 雪降り積もり 道の市

広岡豊樹

人

白菜の 漬物かんで 餅一つ

坪井正康

入選

白菜の 白無垢に似て 葉を重ね

（長橋）

佳作

息白く 白菜漬ける 母想う
白菜の 切り方こだわる 鍋奉行
ゆらゆらと 白菜の湯気 立ちのぼり
白菜の 初雪被つて 年を越す
白菜を 漬ける手の平 赤くなり

丸山征夫
馬場輝仁
鈴木武
渡邊久晃
熊倉高志

「 蝸 」

天

遠くにて そのひぐらしの 声を待つ

熊倉高志

地

ひぐらしの 声は体の サロンパス

熊倉高志

選者吟

武藤昭三先生

ところ得て 白鳥散れり 枯れ平

だいら

雨風に 真向ふ 白鳥 遠ながめ

進みゆく ラデツキ行進曲 初日の出

マーチ

